

◎江戸時代の医者が持っていた暦の知識（要約）090311 島野達雄

(1)

京大富士川文庫所蔵の『医学授幼鈔』（別名『家伝切紙』）は、饗庭東庵（元和元年(1615)－延宝元年(1673)）が述べ、雲庵が記した著作である。饗庭東庵は曲直瀬道三玄朔に学んだとされ、弟子に味岡三伯、孫弟子に小川朔庵らがいる。この学派を富士川游『日本医学史』は、金・劉完素の学説を日本に広めた劉医方（後世家別派）と呼んでいる。

彼らは医学と易や術数との関係を重視したことで知られ、宋・劉温舒『素問入式運氣論奥』を解説した『運氣論奥諺解』の岡本一抱、『医経名数』『納音算法』の堀元厚、『和漢三才図会』の寺島良安などが含まれる。

(2)

『医学授幼鈔』は、第一章・五蔵六府、第二章・十二経脈など八章からなる。

第八章は「算法」と名づけられ、古代中国の医書である『黄帝内経素問』（『素問』と略す）に記された天文暦学の知識に注釈を加え、そろばんの図を交えて四分暦の十九年七閏法の計算を述べている。

しかし、この第八章・算法を詳細に読むと、主として朱子学派の四分暦の知識を敷衍したものであることがわかる。石田秀実氏は「宇宙論に基礎づけられて、気象医学が組み立てられていることを、あざやかに読み解いた記述として、記憶にとどめるに価する章である」（「劉医方という誤解－江戸前期医学史をとらえるための一視点－」、『歴史の中の病と医学』（1997年、思文閣出版、山田慶兒・栗山茂久編）所収）と述べているが、第八章・算法は、朱子や蔡沈が『書経』堯典に加えた注釈にもとづいて「内経の本意」を解釈しているだけであり、「あざやかに読み解いた」とは言いがたい。

(3)

まず、前半の『素問』六節蔵象論の注釈では、「運氣論は暦家の説にて内経の本意に合ず。宋儒の説は内経の本意に合す」（原文はカタカナ）と、『素問入式運氣論奥』や「暦家」の説ではなく、宋儒すなわち朱子学派の説によって『素問』の「本意」を解釈すべきだと主張している。ここでいう「暦家」とは、『漢書』律暦志の撰者である班固を指すのであろう。劉温舒の『素問入式運氣論奥』は、暦に関して班固の『白虎通』を引用している。（班固は『漢書』律暦志の冒頭に「暦のことはよく知らない」と書いている）

著者が運氣論や暦家の説を非とし、宋儒の説を是とする要点は二つある。一つは天・日・月の速度の順序に関する事で、いま一つは「天左旋・日月右行」に関する事である。

本書では「内経の本意」として、「天の周りは第一早く、日行は周り中分なり。月行は周り第一遅し」として、「天」「日」「月」の順の速度で巡っているとしている。また「日月は天に載られたる物なれば、天と齊く左旋すべきの理なり」とも述べている。これはたとえば『書経大全』虞書堯典の注釈である蔡沈『書集伝』に添えられた「朱子曰く、天道は左旋す。日月も亦、只左旋す」「但し天の行くこと健やかなり。一日一夜して周りで常に一

度を差過す。日月は天と違って退く。日は是、一日退くこと一度。月は退くこと十三度有奇」(原文はもちろん漢文)などに依拠したものであろう。

(4)

古代中国の暦法では、『周髀算経』を先駆として「月度疾、日度遲(月の度は疾く日の度は遅し)」「天左旋、日月右行(日周運動で天は東から西へ左旋し、日月は毎日いくらかずつ西から東へ右行する)」という主張で一貫しており、朱子学派の説のほうが異端と言ってよいと思う。天が渾々然として回転するという渾天説と、『晋書』天文志に見える「蟻磨のたとえ」などの蓋天説との論争は、唐代に終結しているが、朱子は渾天説を採用した。

なお、本書では「天の周^{めぐ}り」として「三百六十五度四分度之一」を天行の速度として扱っている。中国の「三百六十五度四分度之一」は、西洋の360度に対応する全天の度数(角度)を指している。『周髀算経』以来、中国正史の律暦志はもちろん朱子学派でも「天体至円、周^{めぐ}り三百六十五度四分度之一」(蔡沈『書集伝』)と、「三百六十五度四分度之一」が天の速度ではなく、周天の度数であると述べられている。

念のために申し添えておくと、四分暦では、「周天365度4分の1」「日行1度」「月行13度19分の7」の三つの数値だけを仮定すれば、19平均太陽年の日数が235平均朔望月の日数に等しくなり、19年に7回閏月をおけばよい、という結論が得られる。

(5)

むしろ『素問』六節蔵象論では、このような議論が行われているわけではない。『素問』の本文は「日を陽と為し、月を陰と為す」「行^{めぐ}るに分紀有り」「周^{めぐ}るに道^{どうり}里有り」「日の行くこと一度、月の行くこと十三度有奇」「故に大小月三百六十五日にして歳を成す」「気余を積みて盈^り閏す」のみであり、『書経』堯典よりは詳しいが、『周髀算経』を超えるものではない。

本書は、『素問』の「周^{めぐ}るに道^{どうり}里有り」に対して、「天の^{かこみ} 周^{みち}を^{のり}道の程にて積れば、百七万^{つも}一千里。わたりを^{はか}計れば^{りなり}三十五万七千里也」と注釈している。この数値は、円周率を3とする『周髀算経』を出典としている。『周髀算経』は蓋天説にもとづいている。渾天説の朱子を是認する本書の著者が混乱していることが、ここでもわかる。

(6)

本書と同じように、江戸初期の和算書にも朱子学派の書を参照したものがある。

和算のなかでもっとも古い暦学の書で、四分暦の計算を詳細に述べている今村知商『日月会合算法』(寛永19年(1642))は、蔡沈『書集伝』と『書経大全』を参照している。(島野達雄「校注・今村知商『日月会合算法』」2000年7月第87回近畿和算ゼミナール)

ちなみに、イエズス会宣教師のジョアン・ロドリゲス(通詞)は、朱子学派の暦に関する知識や計算を、藤原惺窩や林羅山などの日本人朱子学者より、よく理解していたと思われる。ロドリゲスは『日本教会史』(岩波の大航海時代叢書に所収)で詳しく朱子学派の四分暦に関する知識を紹介している。伊東俊太郎氏も『日本教会史』の補注で「ロドリゲスはこのような中国の宇宙生成論、とくに朱子のそれをよく知っていたように思われる」と

推定している。ロドリゲスが朱子学派の学説を研究していたことは、今村知商らがキリシタンであったのではないか、という江戸初期和算家キリシタン説を裏付けている。

我が国の医学の中興の祖といわれる曲直瀬道三（初代）は、門弟3千人を率いてキリスト教に改宗した、と宣教師の報告にある。キリシタンと朱子学との関係については、今後、おおいに研究の余地があると思う。

(7)

第八章・算法の後半は、「算数は曆家劉氏共に毫毛の差なし。天日月の行度を彼是人かえしまでなり」として、四分曆の曆計算にあてられている。

ここでもっとも興味深いのは、「一度者十九分也」「一度と云ふは分になをして十九分也」と、「四分度之一（=4分の1度）」を「四分七厘五毛（=19分÷4）」と小数にしている点にある。中国のみならずメソポタミア、エジプトなどの古代文明国ではかならずと言ってよいほど分数表記が用いられており、中国正史の律曆志も分数表記を採用している。

『医学授幼鈔』の一度十九分・小数表記は、饗庭東庵の弟子・味岡三伯の弟子にあたる岡本一抱の『運氣論奥諺解』に見えるが、劉温舒『素問入式運氣論奥』には登場しない。むろん他の中国の医書、たとえば石田秀実氏が挙げている『類経図翼』にも見えない。また、蔡沈『書集伝』にも見えない。今村知商『日月会合算法』は「一度者謂九百四十分也（一度は謂らく九百四十分なり）」と、一度九百四十分説をとっている。

元・董鼎が著した『書集伝』の解説書『書蔡伝旁通』には、「十九分度之七者」として「以一度分作十九分（一度分を以って十九分に作れば）…」という記述がある。ただし、この直後に「算如以一度為九百四十分而以十九除之則（算は一度を以って九百四十分となす如くして以って十九に之を除けばすなわち）…」と一度九百四十分説が展開されている。

なお、この『書蔡伝旁通』については、荻生徂徠が「書経新注は蔡沈が作にて、たわひもなき物に候。書経は旁通、通考と申す物をつけ御覽被成候がよく御座候」（「徂徠先生答問書」と書いている。実際に読み比べると、『書蔡伝旁通』や『尚書通考』のほうが『書集伝』より「たわひもない」もののように思える。

(8)

一年の日数（平均太陽年）を365日4分の1とし、19年間に7ヶ月の閏月をもうける四分曆に関する知識は、江戸時代を通じて医学者を含む多くの庶民が学んでいた。その知識の多くは朱子学派の書にもとづいていた。

専門家とも言うべき曆学者や和算家たちは、朱子学派が説いた古代の四分曆から、我が国で長く用いられた唐の宣明曆や元の授時曆などの研究へといち早く脱却した。江戸中期以降は、在中国の宣教師たちが導入した、同時代の清の時憲曆の研究に進んでいる。

『医学授幼鈔』の一度十九分説による小数表記は、庶民レベルでも、岡本一抱などの運氣論者以外には受け継がれなかったように思われる。

初心者にわかりやすく四分曆を説明しようと試みた『医学授幼鈔』第八章・算法の限界は、一度十九分・小数表記だけをとっても明らかであろう。●